

令和 6年 7月 26日  
流山市教育委員会指導課  
幼児教育支援センター発行



## 豊かな「架け橋期」を創造する —幼児教育支援センターの役目—

入園・入学した子供たちは、徐々に生活する環境にも慣れ、元気いっぱいの日々を送り始めました。

特に、義務教育開始前後の5歳児から小学校1年生の2年間で「架け橋期」とよび、令和5年2月中央教育審議会「幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会」において、幼児教育施設など施設類型を問わず、家庭や地域の状況にかかわらず、全ての子供が格差なく、質の高い学びへと接続できるよう、架け橋期の教育の充実に取り組むことが示されました。

流山市においても、保幼小の保育・教育にかかわる関係者が情報交換しながら保育・教育内容や方法といったカリキュラムの改善を模索し、段差を滑らかにし、豊かな育ちと学びを保障していく取り組みを進めています。

今年度、幼児教育支援センターでは、子供の成長を切れ目なく支える観点から

- ①保幼小の円滑な接続の内容・方法を見える化した「架け橋カリキュラム」の整備に取り組むこと。
- ②一人一人の子供の特性・発達を的確にとらえ、よりよい環境の構成や調整など教職員支援に取り組むこと。

を進めています。具体的には、次のような事業で実施しています。

- ①小学校及び保幼の見学会、保幼小関連研究会などの事業を通じて。
- ②巡回相談等の相談事業を通じて。



## 子供の発するサインを的確に読み解くことができる支援者に！ —第1回保幼小関連教育研究会から—

各校園では、一人一人の子供の豊かな成長を描いてはいるものの、子供は折々にいろいろなサインを発してきます。その解釈をめぐっては悩む場面も多いもの。

例えば、小学校入学後の1年生が、登校時に昇降口で泣き出したり、教室に入ることをためらったりなどもその一つ。

**この行動には、子どものメッセージや思いが隠れているため、その思いを読み解き、環境を**

**調整していくこと**が状況の改善につながります。

これは、5月に実施した「第1回保幼小関連教育研究会」の中でお話です。講師は、特別支援教育がご専門の千葉大学教育学部の真鍋 健准教授。

特性のある子供の具体的支援について、新たな視点でお話をいただいた中で示された内容の一つです。

今回の研究会の参加者は、小学校 19 校、保育園(所)59園、幼稚園9園、認定こども園 2 園、療育支援の7施設、保育課職員を含め、全体で97人もの参加がありました。(昨年度比 18%増)

内容は、真鍋先生が担当された文部科学省の委託研究報告書「幼保小接続期における切れ目ない支援の実現に向けた調査研究」結果を読み解き、そこからわかることを解説していただくというものでした。

真鍋先生によると、5・6月頃に子供と周囲の人的・物的な環境とのミスマッチが出てくることが多く、子供の気持ちの揺れ動きとなって「見える化」するというものでした。

- ①特に登園時、移動場面、設定保育場面、給食の場面で出やすいこと。
- ②子供の訴える理由ごとに、子どもの特性と周囲の環境などとのズレやギャップを少なくしていくことが重要なこと。
- ③子供が「A どこで、どんな時」「B どんな行動」をとり「Cどんな対応条件を果たしたか」を記録していくこと」で、逆に子供の気持ちの揺れ動きの出にくい状況をつかむことができること。

などのポイントがわかりました。

その後、保・幼・小の先生方は、各グループに分かれ、活発な話し合いを進めました。参加された方々が、この種の悩みや課題へ高い関心を持っていることが強く印象づけられました。

私たち保育・教育にかかわる者が、人や環境との**関係性の中で子供を見て、子供のニーズを絞り込み、また強みも確認して、働きかけていく**ことがとても大事なことで、実は、子供の問題ではなく、大人側の対応にあるという重要な視点をいただきました。

## 参加された方々からの「振り返り」から —第 1 回保幼小関連教育研究会—

- ★気持ちを切り替えにくい子供には、どう寄り添ってきたか振り返ることができました。(保)
- ★ABC の記録してきた内容こそ、小学校へ引き継ぎたいと思いました。(保)
- ★気になる子供への対応への理解がどこまできているのか考えさせられました。(保幼小)
- ★ギャップを減らす前に頑張らせようと動いてしまうことがあったことに気づきました。(保幼)
- ★ギャップのある児童のニーズを考えられていなかったと感じました。(小)
- ★何とかみんなと同じようにと子供を誘導していたことに気づきました。(保幼小)
- ★クールダウンする場所や落ち着けるスペースを設けたいと思います。自分の思いを発揮できる場所作りを考えたいです。(幼小)



## 保幼小の連携は、「実際に見て、知ることから」 —小学校見学会から—

小学校見学会は、保幼関係者が市内19校に分かれて小学校を訪問するという事業で、今年は6月から7月にかけて開催されました。

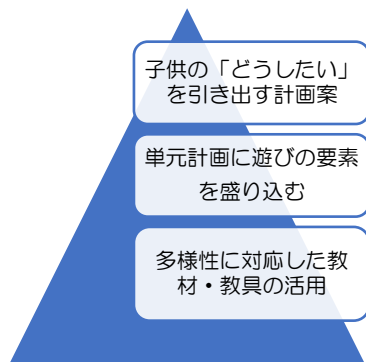
今年度の小学校見学会は、小学校19校に71施設(保育園(所)、幼稚園、認定こども園)で76名の先生が参加され、(昨年度比 46%

増)貴重な機会となりました。

見学させていただいた授業をもとに、話し合いが行われ、参観された保幼関係者からは、多くの感想が寄せられました。

当センターでは、先生方の話し合いや感想から、幼児期の保育・教育と小学校教育と滑らかにつながる要素を3つ、発見することができました。

小学校見学会からわかった「架け橋期」の工夫



### ① 多様性に対応した教材の活用

子供たちの教材として使われていた素材について、例えば、液体粘土など、機能性の高い粘土や絵の具など、扱いやすく、全ての子供の**自由な発想を引き出す教具**が使われるケースが多く見られたこと。子供たちから歓声が上がっていました。

### ② 遊びの要素が取り込まれた活動

体育の授業では、動物の歩き方や動きをまねるなど、**遊びの要素**がふんだんに盛り込まれた楽しい運動遊びが展開されていました。

### ③ 子供の願いを引き出す問いの存在

素材「アサガオ」など、環境とのかかわり中で「これをどうしたい？」と**個々の子供の思いや願いを引き出したり、実現までに見つけさせたり**など、創造性や論理性を引き出そうとする指導や問いかけが多く聞かれました。

これらは、「架け橋期」の教育を考える上で貴重な事例でした。



参加された方々からの「振り返り」から  
—小学校見学会—

各園からのアンケートでは、次のような記述がありました。

- ☆自園では、小学校へ行くための準備となる活動が主となりやすく、幼児の時にしかできない体験や遊びの時間が取りづらくなっていたのではないかと感じました。(保)
- ☆保育園だからできること、環境や実体験を通した遊びを大事にしたいです。(保)
- ☆遊びを通して気づき、創造力、想像力、協調性を伸ばしたいです。(保)
- ☆主体的な活動のための環境づくりが大事だと思いました。(幼)



☆園で楽しんでいる素材(幼)を小学校ではどのようなねらいで用いているのか聞くことができました。(幼)

☆どうしても小学校への就学を意識してしまい、厳しくなることがあります。園での活動がそのまま移行していくことがわかり、安心しました。(保)

☆小学校を見学させていただき、これからの小学校教育が変化していくことを感じ取ることができました。(幼)

☆支援を必要としている児童に対して無理なくスムーズに活動に参加できるよう働きかけを工夫されていてとても素晴らしい



いと思いました。(幼)

☆保育園生活でしかできない遊びを提供し、自分で切り開いていく力を養いたいです。

(保)

☆小学校の科目がすべて園での遊びとつながっていることが再認識できました。(保幼)

☆園での体験を生かした活動は、遊びの上にあることや心情・意欲・態度は積み重ねが大切だと感じました。(保)

**さらに、小学校教員からも情報が届いています。**



★多様な児童のためにも、具体物や視覚的な情報を提示していきたいです。

★経験の中で発見・学びが得られるように時間を作っていきたいです。

★子供が楽しみつつ、配慮を要する子に担任がどうかかわるか。課題を明確にしたいです。

★子供の生活や学習上の段差が起きても困らないように経験をつないでいきたいです。

★言葉だけの指示ではなく、視覚情報を加えています。

★指示の仕方の工夫、話し方の工夫、絵カードの活用など、多様な子供への配慮をしています。

★子供たちの「やってみよう」という意欲や主体性を優先しています。

小学校の授業場面を実際に見学することで、保幼関係者に多くの気づきがあったこと、小学校教員からの意見も聞くことができ、当センターとしても、貴重なアイデアをいただくことになりました。

今後も架け橋期の教育・保育の質を高めるために、各校園が工夫されている貴重な情報を収集していきたいです。



**環境の調整が重要！**

～ 第Ⅰ期 巡回相談から ～

みんなが同じことを一斉にやり、みんなが同じことができることを評価してきたこれまでの教育が変わってきています。

「令和の日本型学校教育の構築」(中教審答申)では、発達に応じて子供が自らの学びを調整し、それを校園が支える仕組みの整備を求めています。

当センターでは、その具体的な支援として、巡回相談では、個別の配慮を必要とする子供のみならず、インクルーシブな保育の人的・物的な環境調整へアドバイスを進めています。

第Ⅰ期の幼保の巡回相談は、心理士及び指導員の2名体制で、5月～8月末日まで、毎週火・金曜日で24園を予定し、現在までに21園が終了しました。

保育・幼児教育の観察にあたり、当日園内で保育配置の配慮をしていただき、園長先生、担任の先生等との面談をさせていただけることにも深く感謝しております。

今回の巡回相談を通して、多様性に対応したクラス運営について難しさを感じ、悩んでいる先生が多いことがひしひしと伝わってきました。

先生方のクラス運営の支援として今後も、子供の観方・捉え方について、違う方向から観てみることをお伝えしていきたいと思っています。

